

読後感

2024. 10. 25

この4月から職場がかわった。仕事内容にも変化があった。小学校から高校、そして中学校から幼稚園へとかわった。それに伴い、新たな出会いがあった。例えば、教材屋さんである。中学校と同じ業者の方もいらっしゃるが、幼稚園や保育所が主戦場である業者さんもいる。本屋さんの担当の方もかわった。私が、まだ若かった頃の教え子だった。これも縁だろうか。

Mさん、Mさんと先生方が呼ぶ教材屋さんがいる。Mさん=Aさんである。私にとっては、このAさんとの出会いが大きい。4月20日だった。福島民友新聞の「随想」欄に、私の原稿が出た。デビュー作である。この原稿をAさんが読んでくれていた。その前に、随想コーナーの新しい執筆者として紹介していただいた記事も見てくださっていた。

初めてお会いした日に、デビュー作「花咲山」のことを話題にさせていただいた。素直に、うれしかった。一度ではなく、何度も読んでいただいているとのことだった。夜、寝る前に読んでくださっているそうである。これも、うれしかった。

私が、エッセイを書く上で、念頭に置いていることがある。それが「読後感」である。読んでくださった方が、読んだあとに、どんなことを考えてくれるか。どんな思いをもってくれるか。そんなことを意識しながら書いている。相手意識だけはもっているつもりである。だから、Aさんが寝る前に読んでくださっているというのがうれしいのである。

その後も、5月の「コッペン」、7月の「たらの芽」、8月の「チキンライス」、9月の「金木犀」と、おおよそ一月に1回のペースで掲載させていただいている。ということは、月に1回は、Aさんのコメントを聞かせていただけるということである。いつの間にか、そろそろAさんがいらっしゃる頃だと気にかけるようになってきた。

果たして、明日、10月26日に出る原稿は、Aさんにとってはどうなのだろうか。そんなことも考えたりする。毎回、掲載されるたびに、各方面から連絡をいただいたり、コメントをいただいたりしている。中でも、Aさんは、レギュラーとも言える存在である。書く方にとっては、励みになる。自分の原稿が新聞に載るとなれば、いろいろと考える。Aさんの存在が、そのコメントが私の背中を押してくださっている。

職場がかわれば必ず新しい出会いがある。出会い、それは素敵なものである。Aさんに感謝しつつ、これからも読後感を大切にしたい文章を書いていきたい。